
魔法少女リリカルなのは～風が吹く真の夜～

ねこミミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは風が吹く真の夜

【Nコード】

N4736L

【作者名】

ねこミミ

【あらすじ】

両親を無くし、1人海鳴市で暮している少年、風見 真夜^{かざみ しんや}
冬のある日、帰りが遅くなってしまった僕は近道をするために公園の中を通った。
公園の中を歩いていたら片隅に倒れている少女を見つけた。黒をメインにした服に金髪の少女だ。

悲しみを背負った少年の話
始まります

プロローグ・・・見たいなもの（前書き）

ねこミミ

「初めまして、作者のねこミミと申します」

真夜

「主人公の風見 真夜といいます」

ねこミミ

「小説なんて初めて書くからな
この先ものすごく不安だな」

真夜

「そうなの？」

でも、がんばろう」

ねこミミ

「そうだな。真夜の言うとおりだ。
諦めず、最後まで書けるように頑張るよ」

真夜

「うん。その意気だよ
応援してる。」

でわ、プロローグ・・・見たいなもの、どうぞ♪

プロローグ・・・見たいなもの

目の前が真っ赤だった

海に沈む太陽のような

いや、それ以上に赤かった

???

「真夜！

それを持って早く逃げなさい！」

そういつて父さんは僕にエメラルド色のブレスレット渡した

真夜

「父さんは、どうするの？」

父

「父さんは・・・もうだめだ・・・」

分かってはいた。父さんの体は倒れてきた柱に潰されてしまっている
僕と母さんじゃ持ち上げる事は出来なかった

父

「はや・・・く・・・行くんた・・・
お前達だけでも・・・幸せにな・・・」

そのときの父さんの顔は、

笑顔だった

母さんと一緒に外に出たのとほぼ同時に家は崩れた

それを見ながら僕は、

真夜

「うつ・・うつ・・うあああああああああ！！！」

この日、僕の父さんはこの世を去った

なんでこんなことになったのかも、犯人も分からないまま僕と母さんは父さんが昔使っていた別荘のある海鳴市に向かった

プロローグ・・・見たいなもの（後書き）

どうでしたか？

初めてですので変かもしれませんが、そこら辺は許して下さい
内容的にはオリジナル半分、原作半分くらいで書いていきたいと思
っております。

主人公の設定を少し載せます

風見 かざみ 真夜 しんや

身長はフェイトと同じくらい

容姿はTOGのアスベルみたいな感じ

髪は黒で眼は紅

趣味は料理と掃除

火にトラウマあり 料理をするくらいなら平気

とりあえずこのくらいで。

誤字、脱字、アドバイス、感想をお待ちしております

それでは、次の話でお会いしましょう

あなたは運命を・信じますか？（前書き）

第1話・・・なのかな一応。

それでは、始まります。

あなたは運命を・・・信じますか？

父さんが死んでから、海鳴市に引っ越してきて2年がたった。

引っ越してすぐに母さんが病に倒れた。

そして・・・去年、息を引き取った。

母さんも死ぬ間際に幸せになってねと言っていた。

僕はその日以来、笑わなくなった。

真夜

「母さんが死んでからもう1年か・・・」

僕は今日の夕飯の材料を買いながらそんな事言ってみた。

両親が残した物といえばマンション一つくらい買えるお金。

家族3人が写っている写真。

そして、父さんから貰ったエメラルド色のブレスレットだ。

最近気がついたのだがブレスレットの中心には翡翠色の玉が埋め込んであった。

そんな事を考えながら買い物が終わらせたら辺りはもう真っ暗だった。

真夜

「急いで帰らなくちゃ・・・」

夜は好きだがあんまり遅くなるのはまずいと思ったので公園を通って帰ることにした。

公園を通ると少しはショートカットになるのだ。

真夜

「ん・・・！」

誰か倒れてる」

公園の端にある木にもたれ掛かってる人がいた。近くに寄ってみると女の子だった。

服は黒で髪は金髪、正直かわいいと思った。

真夜

「・・・！」

怪我してる・・・」

声を掛けようとして気が付いた。彼女の体のあちこちに傷が見える。僕は上着を彼女にかけて一旦、家に走って帰った。

家に着いた僕はすぐに救急箱と、おにぎり、お茶を持って公園に急いで戻った。

彼女の側に寄り、簡単な応急手当をした。

その後、彼女が起きそうになかったので僕は彼女が起きるまで側にいることにした。

??? side

私・・・どうしたんだっけ？

たしかジュエルシードを見つけて封印して・・・そうだ！近くにあった公園で休んでたら寝ちゃったんだ。

????

「んっ・・・」

私は目を開けて周りを見回した。

真夜

「気が付いた？

怪我・・・してたから手当てしたんだけど・・・迷惑だったかな？」

私は自分の体を見た。傷を負っていたところには包帯が巻いてあった。

????

「ううん、そんなこと無いよ。

助けてくれてありがとう」

真夜

「どういたしまして・・・

僕、風見 真夜って言います。あなたの名前・・・良ければ教えて下さい」

フェイト

「フェイト。フェイト・テストアロツサって言います」

s i d e o u t

これが僕と彼女の出会いだった。

あなたは運命を・・信じますか？（後書き）

ねこミミ

「とりあえず、すいませんでしたー」

真夜

「なんでいきなり土下座？」

ねこミミ

「いやーフェイトの喋り方が違うような気がしてとりあえず頭さげしてみた」

真夜

「そ、そうなんだ

でもいいんじゃないの？半分以上はオリジナルになるかもしれないんだから」

ねこミミ

「そうだね。

それでもいい方、これからよろしくお願いします」

真夜

「それじゃ、さようなら」

目覚めた力は何のために（前書き）

第2話です たぶん（汗）

遅くなりました
すいません

でわ、始まります

目覚めた力は何のために

その後僕は、フェイトさんに家に来ないかと誘ったが断られた。待っている人がいるらしい。だから僕は無理に誘わなかった。

ちなみに何故フェイトさんと名前で呼んでいるかというと。

最初はテストロッサさんと呼んでいたが、名前でいいと言われたからである。

真夜

「あっそうだ。おにぎりがあるんだけど食べますか？」

そういつて僕は持ってきたおにぎりを鞆から出した。

フェイト

「えっ・・・悪いよ。」

手当てしてもらったのに食べ物までなんて」

真夜

「気にしないでください。作ったのは僕の勝手ですが、貴女のために作ったんですから良かったら貰ってください」

フェイト

「ありがとう、それじゃあいただくね」

そう言つてフェイトさんはおにぎりの入った包みを手にとり微笑んだ

真夜

「いえいえ、僕の気持ちですから」

フェイト

「そろそろ帰ります。怪我の手当てなどありがとうございます。」

といってフェイトさんは手を振って帰っていった。僕も手を振ってさようならをしてフェイトさんと別れた。

真夜

「久しぶりだったなあ・・・あんなに喋ったの・・・」

母さんが死んでから人と話すことをあまりしなかったからなあ。

そんなことを思いながら帰り道を帰っていたら遠くの方で光を見た。
黄色と桜色と青色の光を。

フェイトside

真夜と別れてから私はジュエルシードを探すために空に飛び立った。
市街地の方でジュエルシードの反応を見つけ、アルフに連絡を取り
市街地に向かった。

向かっている途中、真夜から貰ったおにぎりを食べた。

フェイト

「あっ・・・このおにぎりすごくおいしい！
アルフにも残してあげよう」

私は包みの中にある4つのおにぎりの2つを食べ、残りをアルフのために残した。

市街地のビルの屋上には先に来ていたアルフを見つけた。

フェイト

「アルフ、ジュエルシードは？」

アルフ

「フェイト、ジュエルシードならあそこだけど・・・
今まで何処に行っていたのさ。
心配したんだよお。」

その包帯はどうしたんだい？」

フェイト

「これはね、私を助けてくれた男の子がしてくれたんだよ。
それでね、おにぎりも貰ったんだよ。」

帰ったら一緒に食べようね」

アルフ

「そーなんだ、たのしみだな～
で、今日はどうするんだい？ 反応はあるけどこれだけごみごみして
れば探すのが一苦労だね」

フェイト

「ちょっと乱暴だけど、周辺に魔力を打ち込んで強制発動させるよ」

アルフ

「あー待った。それあたしがやる」

フェイト

「大丈夫？結構疲れるよ」

私が心配そうに見ていると

アルフ

「このあたしを一体誰の使い魔だど？」

フェイト

「それじゃあお願い」

アルフは掛け声とともに魔力を放った
空が暗くなり雷鳴も響いてる

フェイト

「・・・！見つけた」

アルフ

「けど、向こうも近くにいますみたいだね」

気づいたら結界が張られた

フェイト

「早く、片付けよう」

私はデバイスのバルディッシュに指示し封印を急いだがあっちもは速かった

フェイト

「ジュエル・・・」

????

「シード・・・」

フェイト&????

「封印!!」

side out

真夜

「何だろう・・・あの光・・・」

綺麗だった・・・空に通った1つの青い光が。

なんだろう・・・あそこに行けばフェイトさんに会える気がした。それと同時に嫌な予感もした。そのときだった。????

『見に行かないのですか?マイマスター』

声が出た瞬間、父さんから貰ったブレスレットの玉が割れた。中から手のひらに収まるくらいの両刃の剣のキーホルダーみたいな

物が出てきた。

真夜

「君が・・・話しかけてるの？」

???

『はい、そうですよマスター。』

自己紹介をしますね。私の名前はデステイニー。
どうやら前のマスターがあなたが魔法に関ったら起動するよう何らかの細工をしたみたいですね』

なんだか訳の分からない単語が聞こえた

真夜

「ま、魔法？」

それに前のマスターってもしかして！」

そこまで言っただけが腑に落ちた。これしてくれたのは父さんだ。

デステイニー

『その通り。あなたの父・風見 刀夜です。
あなたの父は魔法使い、そして騎士でした』

真夜

「そう・・・なんだ。

僕にも・・・なれるのかな」

デステイニー

『マスターならなれますよ。
魔法使いにも・・・騎士にも』

真夜

「なら教えて、魔法使いに・・・騎士に・・・誰かを守る力の使い方を！」

デステイニー

『はい、マイマスター。』

では、ご命令ください・・・セットアップと。そして創造してください。自分を守る服を』

真夜

「わかった。

デステイニー・・・セット・・・アップ！」

服は薄い緑色の長ズボンに緑色の長袖に白いロングコートとかなりシンプルにした。

手には170cmくらいの大剣があった。だがよく見ると剣の刃は平らで触っても切れそうにない。

デステイニー

『私は斬るのではなく、叩き潰すのに特化されています』

今度は大剣から声が聞こえる。

それから魔法の使い方などを教えてもらいながら青い光が出ているところに向かった。

光の近くに行くとフェイトさんと白い服の女の子がいた。

真夜

「フェイトさんも魔法使いなんだ・・・」

そんなことを呟いていたら声が聞こえてきた。

なのは

「私、なのは。高町なのはだよ」

白い服の女の子は高町さんって言うらしい
そんなことより

真夜

「とりあえず様子を見よう。

どちらが正しいかはわからないけど、僕はフェイトさんを助ける。
・・・っ！」

そう言ってるうちにフェイトさんに高町さんの砲撃が当たりそうになる

急いでフェイトさんの前に立ちデステイニーで防ぐ。

フェイトさんも高町さんも驚いた顔をしていた。煙が晴れ2人の視線が僕に集まっていた。

フェイト

「真夜君・・・」

なのは

「君は・・・誰？」

真夜

「疾風の騎士、風見真夜・・・フェイトさんに助太刀します」

この日、僕は魔法使いになった。

目覚めた力は何のために（後書き）

ねこミニ

「すいませんでしたー」

真夜

「また土下座なの？」

ねこミニ

「だって無印の時代なのにアームドデバイスって」

真夜

「まあいいんじゃないの？」

ほとんどオリジナルなんだし」

ねこミニ

「ん〜まっいっか。なんとかなるでしょ（笑）

それでは真夜の魔法使いとしてのプロフィールです」

風見 真夜

7歳 フェイトたちの1つ下

魔力はA+

大剣のアームドデバイス剣の長さは170cmで重さは僅か4キロ

斬るより、叩き潰すに近い

ベルカ式魔法をつかうがカートリッジシステムはまだ搭載されていない

魔法陣の色は深緑色

服はまたもやTOG、アスベルの色違い

とりあえずはこんな感じです

それでは
感想、アドバイス、質問などお待ちしております

友達（前書き）

更新、遅くなりました

すいません

それではどうぞ。

友達

真夜

「疾風の騎士、風見 真夜・・フェイトさんに助太刀します」

フェイトさんを守るために出てきたのはいいのだが、その後どうするかまでは考えてなかった。とりあえずフェイトさんに声をかけてみよう。

真夜

「フェイトさん、大丈夫ですか？微力ながら助けに来ました」

フェイト

「真夜も魔法使いなんだ・・じゃあ真夜もジュエルシードを狙ってるの？」

ん？ジュエルシード？もしかしてあの青い宝石のことかな・・僕もってことはフェイトさんはジュエルシードを集めているんだ。なら僕は・・

真夜

「いえ、僕はフェイトさんの手伝いに来たんです。ジュエルシードを集めるなら僕も手伝います」

なのは

「フェイトちゃん！！真夜君！！」

真夜・フェイト

「！！」

突然、高町さんがフェイトさんと僕の名前を叫んだ。

なのは

「フェイトちゃんは・・話し合いだけじゃ・・言葉だけじゃ何も伝わらないって言ったけど・・話さないと・・言葉にしないと伝わらない事だってきつとあるよ！」

フェイトさんはずっと黙っていた。

なのは

「何も知らないのにぶつかり合うのは私、嫌だ！」

高町さんの言葉は正論だ。けど言葉ではなく、行動で伝わる事もある。

なのは

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから！最初はユーノ君のお手伝いで集めてたけどジュエルシードの力で町の人や大切な人に危険が降りかかったら嫌だから！」

これが・・私の理由！！フェイトちゃんと真夜君の理由を教えて！」

真夜

「僕はフェイトさんの手伝いだ。久しぶりに知り合えた人だから・・それだけの理由です」

フェイト

「・・・私は・・・」

高町さんの想いに戸惑いながらもフェイトさんが理由を答えようと

した時

アルフ

「フェイト！答えなくていい！」

赤い狼が小動物を睨みながらフェイトさんの言葉をさえぎった。

実際、睨んでいるのかは分からないけど・・・というより動物が喋ったのが驚きだ

フェイト

「アルフ・・・」

アルフ

「優しくしてくれる人達のところでぬくぬくと甘ったれて過ごしたガキンちよに、何も教えなくていい！」

真夜

「僕も赤い狼に賛成かな・・・」

理由が知りたいとしても、それはフェイトさんが想ったときに言え
ばいい・・・と思う。だから今は言わなくていいと思うよ。

だったら・・・ここは僕にやらせて」

フェイト

「あっ・・・まって！」

僕はジュエルシードの元に飛んでいった。そしたら高町さんも飛んできた。

真夜

「高町さんですね。申し訳ありませんがこのジュエルシード・・・」

僕が貰いますっ!」

同時にデステイニーを・・・投げた
ごめんデステイニー・・・あとでちゃんと謝ろう・・・

なのは「にゃあー！ー！ー！ー！」

デステイニーを投げた事によって高町さんが止まってシールドを張った。

真夜

「デステイニー、モードリリース!」

デステイニーを待機状態にして、僕のところに戻した。
そして僕はジュエルシールドの前に立った。

真夜

「デステイニー、これどうすればいい?」

デステイニー

『これはロストログアですね。危険な物なので封印したいのですが、私はこの手のことは苦手ですので。魔力を送れば素手でも出来ますが、すごく危険です』

真夜

「それでもやらないと。この体がどうなろうとも手伝うって約束したから」

僕はフェイトさんを1度見てから、ジュエルシールドを両手で包み魔力を送った。

その瞬間、体に激痛が走った。

真夜

「うあああああああああ」

痛み耐えながらもジュエルシールドに魔力を送り続け、止まるように願った。

体に多数の傷が出来る。しばらく押さえているとジュエルシールドの光が納まってきた。

デステイニー

『成功です。マスター』

真夜

「よかつ・・・た・・・」

言葉を発すると同時に僕は倒れた。

フェイト

「し、真夜ああああ！」

フェイトさんが僕を支えてくれた。僕はフェイトさんにジュエルシールドを渡した。

真夜

「はい・・・フェイト・・・さん・・・約束・・・通り・・・ジュエル・・・シールド・・・取りましたよ・・・」

フェイトさんはとても泣きそうな顔だった。

フェイト

「なんで・・・私なんかのためにここまでやろうとするの？」

真夜

「僕にも・・・わかりません。ただ・・・そうしたかったから・・・です。」

フェイトさんの・・・手伝い・・・できましたか？」

フェイト

「うん。助かったよ・・・真夜」

フェイトさんは微笑んでくれた。もしかしたらその笑顔が見たかったのかもしれない。そろそろやばいかもしれない。目が霞んできた。だから最後の力を振り絞り言葉を出した。

真夜

「フェイトさん・・・お願いがあります・・・」

フェイト

「何？」

真夜

「僕と・・・友達に・・・なってくれませんか？」

フェイトさんは一瞬、驚いた顔をしたがすぐに微笑み返事をくれた。

フェイト

「うん・・・いいよ・・・」

そこで僕の意識は闇に堕ちた。

友達（後書き）

ねこミミ

「もう、ほとんどオリジナルだな」

真夜

「いいんじゃないの？」

ねこミミ

「そうだな。オリジナルを主体にしたいです。
これからもよろしく」

真夜

「お願いします。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4736/>

魔法少女リリカルなのは～風が吹く真の夜～

2010年10月10日21時45分発行